

シュザンヌ・セゼールの熱帯風景： 「大いなるカムフラージュ」を読む

Le paysage tropical chez Suzanne Césaire : Une lecture du
« grand camouflage »

大辻 都

Miyako OTSUJI

はじめに

1939年から40年代前半にかけ、第二次世界大戦は世界の多くの地域を巻き込んだ。主役となったいくつかの大国の名は誰の口にも上るが、その災厄が前線から遥か遠い土地にまで及んだことは知られていない。

ヨーロッパから大西洋を隔て7000キロ離れた、カリブ海アンティユ諸島のフランス領。そのひとつであるマルチニック島では、親ナチスのペタン元帥がヴィシーを本拠地とする本国で権力を掌握するのにもない、同政権から派遣されたロベール総督の支配下に置かれていた。

本国経済をうるおす熱帯産品獲得のためマルチニックで数百年続いた奴隷制度はおよそ一世紀前に廃止されていたが、大戦が勃発すると依然植民地であるこの島は、近隣のグアドループ同様に海軍の艦隊に包囲され、一部の植民者と結託した当局によるファシスト的な政策を島民は甘受していた¹。

このような厳しい時代、文芸誌『トロピック』*Tropiques*は刊行される。主幹のエメ・セゼールやその同人たちは、1920年代のパリで高等教育を修めた有色知識人であり、エメは後に世界を揺るがす長編詩『故郷への帰還の手帖』（『帰郷ノート』*Cahier d'un retour au pays natal*, 1939）とともに、そのなかで展開され

る世界観、ネグリチュード（黒人性）を世に問うた直後であった。

『トロピック』リプリント版に寄せ1973年に書かれた同人ルネ・メニルの序文によれば、この雑誌に寄稿された数々の論考は同一の哲学に基づいて書かれたものではない。それらはそれぞれ複数の哲学から発し、互いに関連したり、時に対立することもある。そして『『トロピック』』とは、40年代における革命を志すアンティユ左翼の複数のパースペクティヴ、複数の希望と意志であった」という²。

本稿では、1941年から45年まで発行されたこの『トロピック』のなかから、同人のひとりであるシュザンヌ・セゼールが発表した論考を取り上げ、彼女がマルチニック、ひいてはアンティユ諸島の人々の自己意識と詩学をどのように構想したかをたどってゆく。

1. 文芸雑誌『トロピック』と同人シュザンヌ・セゼール

非常に困難な状況のなか、『トロピック』は1941年から1945年まで、計11回14号まで出版された（うち6・7号、8・9号、13・14号は合併号）。発行部数500部、一号あたり当初は12フラン、後期には20フランで販売されたこの雑誌は、主に島内の知識人やセゼールらの教え子である学生が読者だった。直接に政治問題を扱うわけではない文芸雑誌でありながら、1943年にはその前衛性が当局からの検閲の対象となり、同年、現地でシャルル・ド・ゴール率いる「自由フランス」に賛同するディシダンス dissidence（本国でいうレジスタンス）が勝利しロベールが逮捕されるまでの期間、発禁の憂き目に遭っている。

小さな島の内部だけで流通していた『トロピック』だが、偶然がこの雑誌の命運を変える。1941年4月、マルセイユから船でニューヨークへ亡命する途中、マルチニックを訪れた本国の文学者アンドレ・ブルトンに雑誌は見出され、高く評価されるのであ

る。毎号、雑誌には編集者たち自身が詩、詩論、あるいは文化論を掲載した他、多国籍の執筆者による寄稿や転載が見られた³。シュザンヌ・セゼールもこの雑誌に計7編のエッセイを寄稿している。そして彼女が書き残したもののうち公にされている作品は、すべてこの雑誌に掲載されたものだ⁴。

偉大な詩人にして政治家であったエメと離婚した後のシュザンヌの動静はほとんど知れず、著作として発表されたものもなかった。エメが亡くなり、大統領列席の大規模な葬儀がおこなわれたのは2008年4月であるが、その翌年の2009年5月、グアドループ出身の作家ダニエル・マクシマンにより彼女の全エッセイがまとめられ、実はその死後40年以上を経て、初めてシュザンヌ・セゼールの著者名での書籍として刊行されるにいたる。マクシマンはエッセイに先立つ解説において、シュザンヌの思想を実人生や時代背景と結びつけ、さらにエッセイに関連する当時のいくつかの原稿を付した上で構成した⁵。

そのタイトルは『大いなるカムフラージュ——ディシダンスの記述(1941-1945)』*Le grand camouflage : Ecrits de dissidence (1941-1945)*。「大いなるカムフラージュ」とは1945年に書かれた作家の最後のエッセイのタイトルでもあり、その重要性から本稿でもこのエッセイを重点的に考察の対象とする。

シュザンヌ・セゼール(旧姓ルスイ Roussi)は1915年、マルチニックのトロワ・ジルで砂糖工場労働者の父と小学校教師の母の間に生まれ、戦間期の1930年代前半、パリのエコール・ノルマル・シュペリウールで古典文学を学んだ女性である⁶。留学中、ナルダル姉妹の文学サロンに出入りするなどしていた彼女は、友人ミレイユ・セゼールの兄エメと出会って結婚し、1939年、夫婦でマルチニックへ帰還した後は、ベルヴュの技術高校、また夫と同様シェルシュール高校の教師となる。そのかわり、エメ、ルネ・メニル、アリスティド・モジェ、リュシー・テゼとともに、

1941年、文芸雑誌『トロピック』*Tropiques*を発刊し、寄稿を続けたのである。

エメと離婚した3年後の1966年、パリ郊外イヴリーヌでひっそりと亡くなったシュザンヌの作品は長らく黙殺されており、1978年、『トロピック』誌のリプリント版が出た後も状況は変わらなかった。例外的に1977年、同じアンティユ諸島グアドループ出身の作家マリーズ・コンデがアンティユの女性作家たちの作品を批評・分析した『女たちの言葉』*La parole des femmes*でほぼ初めてシュザンヌ・セゼールを取り上げ、その慧眼を評価している。また1981年、同じくグアドループ生まれのダニエル・マクシマンはフランス語圏カリブ海の近現代史をたどる小説『孤独な太陽』*L'isolé soleil*において、登場人物であるアンティユ女性を通してシュザンヌとの対話を試み、アンティユ文学における彼女の位置づけを示そうとした。さらに90年代になると、シュザンヌのテキストに対し、欧米のシュルレアリスト女性作家研究、あるいはポストコロニアル研究、カリブ海文学研究の分野から積極的な関心が示されるようになる。

2. 植物的なるもの

1941年から45年という短い期間に書かれたシュザンヌ・セゼールの全論考を概観してみると、マリ＝アニエス・スリオやカーラ・ラビットが指摘するとおり、初期と後期ではその論調には変化があるように思われる⁷。発表順にテキストを見てわかるのは、初期のエッセイにおいては、ドイツ・ロマン主義の流れを汲む民族学者レオ・フロベニウスの文明論、哲学者アランの思想、そしてシュルレアリスム（とりわけアンドレ・ブルトン）といった、彼女に影響をあたえたヨーロッパの思想を取り上げて紹介し、解釈することが主眼となっていることだ。

1942年に発表された4つ目のエッセイ、「ある詩の貧困：ジョ

ン＝アントワーヌ・ノー」*« Misère d'une poésie : John-Antoine Nau »*でも同じくヨーロッパ人作家を扱っているが、ここに新しい視点の兆しを読み取れる。それはマルチニックの人々の自己意識と未来という視点であり、以後発表される後期の3つのエッセイではこの新たな視点が主要なテーマとなってゆく。

「ある詩の貧困」でシュザンヌは、熱帯の自然美を感傷的な態度で礼賛するという、ヨーロッパの詩人たちが長らく示してきた典型的な態度を痛烈に批判している。

シュザンヌは、詩人ノーがマルチニックの美しい自然——タマリンドやココ椰子の木々——を描写した「アンティユの夜明け」という詩を取り上げた上で、「彼は脇を歩いているのだ。観察しているのだ。だが「見て」などいなかった⁸。彼はニグロを憐れむようにはなるのだが、ニグロの魂をわかったわけではない」と糾弾し、これは「ハンモックの文学」「砂糖とバニラの文学」「文学的なツーリズム」であり、そこには「詩」がないと批判している⁹。そしてこのエッセイの末尾において彼女は、いわばマルチニックの詩学宣言をおこなうのである。

[...]la vraie poésie est ailleurs. Loin des rimes, des complaintes, des alizés, des perroquets. Bambous, nous décrétons la mort de la littérature doudou. Et zut à l'hibiscus, à la frangipane, aux bougainvilliers.

[...] 真の詩とは彼方にある。脚韻からも哀歌からも貿易風からも鸚鵡からもほど遠い。バンブーなどには、ドウドゥ文学の死を宣告してやろう。ハイビスカス、フランジパン、ブーゲンヴィリアなんか糞喰らえ。

La poésie martiniquaise sera cannibale ou ne sera pas.

マルチニックの詩は人喰いとなろう、さもなければ存在し

ない¹⁰。

複数の植物名が並べられ、激しく拒絶されているが、批判の対象はもちろん自然そのものではない。「ハンモックの文学」や「ドゥドゥ文学」と呼ばれてきた、熱帯の自然を甘く心地よいものとして表面的に礼賛するエグゾティスムの姿勢こそが糾弾の矛先であり、このような態度での植物その他の自然との関わりを拒否しなければマルチニックの文学は作れないとシュザンヌは考えている。最後の行は敬愛するシュルレアリスト、アンドレ・ブルトンの有名な宣言、「美は痙攣的なものであるだろう、さもないと存在しない」に倣ったものだ。ここで現れる「人喰い」cannibaleとは、コロンブスにそのように認識されたアンティユの先住民カリブ族 Caribe から派生してできた語彙であり、当然この先住民を想起させる。人間の作り出す「詩」とは対極にある語ともいえる「人喰い」というその意味をシュザンヌは逆手にとらえ、感傷的な視線を排し、悪い意味でのヒューマンイズムの粉碎の上に新しい詩学が作り出せると考えているようだ。

シュザンヌのテキストには、こうした熱帯の植生の表面的な礼賛を拒否するのとは異なる次元での植物観が見出せる。そこには初期のエッセイから一貫して、先にも名を挙げたフロベニウスの民族学からの強い影響がある。シュザンヌが30年代にパリの知識人の間でブームとなったこの民族学者から得た最大の示唆は、アフリカ文明におけるエチオピアの民の生のあり方だろう。彼女はこの特徴、すなわち生のあり方としての植物性をマルチニック人の性向に当てはめ、42年のエッセイ、「ある文明の危機」« Malaise d'une civilisation »において彼らを「植物人」と位置づける。

Qu'est-ce que la Martinique ?

— L'homme-plante.

Comme elle, abandon au rythme de la vie universelle. Point d'effort pour dominer la nature. Médiocre agriculteur. Peut-être. Je ne dis pas qu'il fait pousser la plante ; je dis qu'il pousse, qu'il vit en plante. Son indolence ? celle du végétale. Ne dites pas : 《 il est paresseux 》, dites : 《 il végète 》.

マルチニック人とは何か？

—— 植物人である。

植物のように、普遍的な生のリズムに身を任す。自然を支配しようと頑張ることなく。凡庸な農民。おそらくは。植物を生やすということではない、彼が生える、植物の生を生きるということだ。無気力さ？ 植物の性質である。「怠け者」といわないでほしい。[植物として]「生育している」のだと¹¹。

シュザンヌのこの態度は、見方によっては被植民者の受動性というステレオタイプを疑わない本質主義と映り、批判を受けることもあった¹²。だが同時にそこには、植物人の持つ本来的な力についても述べられていることを見落としてはならない。

[...]Son mot préféré : « laissez porter ». Entendez qu'il se laisse porter par la vie, docile, léger, non appuyé, non rebellé — amicalement, amoureusement. Opiniâtre d'ailleurs, comme seule la plante sait l'être. Indépendant (indépendance, autonomie de la plante). [...]la plante piétinée mais vivace, morte, mais renaissante, la plante libre, silencieuse et fière.

[...]彼の好きな言葉は「なすがまま」だ。従順に、軽やかに、依存することなく、反抗することなく、友好的に、愛情深く、

生命のなすがままなのだ」と理解してほしい。それに一徹である、植物のみが存在というものを知っているのだから。独立している（植物の独立・自治）。[…] 地を踏みしめるが快活で、枯れるが再生する植物、自由で静かで誇り高い植物¹³。

このように述べた後、自らを他者のスタイルのもとに置く、すなわち同化主義的なマルチニック人の態度は、いわば疑似—文明的なるものを創り出した上に成り立っていると注意を喚起し、エチオピア的・植物的な態度が真の文化スタイルの出発点とする¹⁴。

なすがままに、しかし実は自律的に生きる植物としてのマルチニック人という発想は、被植民者の同化という観点のみならず、ヴィシー政権下で当局からの印刷紙の配給と引き換えに原稿の検閲を受けねばならなかった1942年という時代をも反映しているといっていだろう。このエッセイが発表された1942年4月の第5号刊行後、『トロピック』は「革命志向、人種主義的、セクト的」*révolutionnaire, raciale et sectaire*と指摘され、休刊となる¹⁵。シュザンヌが再びエッセイを発表するのは、ヴィシー政権陥落後に雑誌が復刊した1943年2月の6・7号に続く10月の8・9号からである。

3. 現代作家への遺産——「大いなるカムフラージュ」の詩学

このようにマルチニックの集団意識を形成しようと試みていたシュザンヌ・セゼールは、「ある文明の危機」を発表した1942年の時点ですでにフランスへの同化主義を拒否するだけにとどまらず、『トロピック』同人たちが推し進めてきたネグリチュードにおける懐古的な側面にも疑問を呈していた。ネグリチュードに限界を見ていた彼女は、それに代わる価値として多様な起源をもつカリブ海の文化を積極的に評価し始める¹⁶。そして、1945年に

発表された「大いなるカムフラージュ」において、同人エメ・セゼールとは明らかに距離のあるその視点が同胞への呼びかけとして現れるのである。

この節では、紙面の6ページ半を占めるこのエッセイの構成と表現を検討し、シュザンヌの最終的なヴィジョンを探っていくこととしたい。

「大いなるカムフラージュ」は29の段落により構成された文章であるが、ここではその内容に沿い、大きく3つに分けて考察する。その区分は、マルチニックを含むアンティユの自然描写を中心とする第1段落から第13段落まで、次にアンティユの歴史とそれに起因する現代の社会的病巣をめぐる第14段落から第25段落まで、さらに来るべきアンティユをめぐる第26段落から末尾の第29段落までとなる。

・4つの種と何十もの血

まず冒頭から見てゆくと、第1段落は謎めいた詩的な表現での風景描写に始まる。

Il y a plaquées contre les îles, les belles lames vertes de l'eau et du silence. Il y a la pureté du sel autour des Caraïbes. Il y a sous mes yeux la jolie place de Pétionville, plantée de pins et d'hibiscus. Il y a mon île, la Martinique et son frais collier de nuages soufflés par la Pelée. Il y a les plus hauts plateaux d'Haïti, où un cheval meurt, foudroyé par l'orage séculairement meurtrier de Hinche. Près de lui son maître contemple le pays qu'il croyait solide et large. Il ne sait pas encore qu'il participe à l'absence d'équilibre des îles. Mais cet accès de démente terrestre lui éclaire le cœur : il se met à penser aux autres Caraïbes, à leurs

volcans, à leurs tremblements de terre, à leurs ouragans.

島々を覆うのは、水と静寂からなる麗しきみどりの箔。カリブ海を巡る塩の純粹。眼下には、松とハイビスカスの美しい土地ペティオンヴィル。わたしの島マルチニックとプレ山から吹きつける雲の新鮮な首飾り。他に追隨を許さないハイチ平原の高みでは、太古からのエンチの殺し屋たる嵐に撃たれ、一頭の馬が息絶える。そのかたわらでは主人が堅固にして広大と疑わない国を見つめる。彼はまだ自分もまた島々の不均衡の一部なのだと気づいていない。だが土地の狂気に触れたことで、その心にも光が射し込む。彼は他のカリブ海を、他の火山を、他の地の揺れを、他の嵐^{ウラガン}を思うようになったのだ¹⁷。

書き手は上空から島々を俯瞰し、海や火山、ハリケーン（ウラガン）、熱帯の植物に言及するが、そこには同じカリブ海といっても地理的には離れている大アンティユ諸島のハイチ（ペティオンヴィル、エンチ）と小アンティユ諸島のマルチニック（プレ山）が同時にとらえられている¹⁸。したがってこれは現実のみに基づく写実主義的な描写ではない。シュザンヌだけでなく、エメや他の同人にとっても同じことだが、ここでマルチニックとハイチを同列に置くことは重要な意味をもつ。かつて同じフランス領でありながら、いちはやく奴隷たちが蜂起し、黒人国家を成立させたハイチは、いわばマルチニックが未だ手中にしきれていないネグリチュードの土地である。だが両者はやはり同じカリブ海にあり、並列されることで共有されるものが見えてくる。「島々の不均衡」「土地の狂気」という不穏な表現が、単なる風景描写を超えた問題提起となっている。

次の段落ではこの地域を定期的に襲うハリケーンの到来が描かれ、その進路としてカリブ海のさらなる地域名、プエルト・リコやフロリダの名が現れると同時に、地理的な形状とつながりが浮

かび上がる。

A ce moment au large de Porto Rico un grand cyclone se met à tournoyer entre les mers de nuages, avec sa belle queue qui balaye à mesure le demi-cercle des Antilles.

この時、プエルト・リコの沖合では、雲の海でハリケーンが逆巻きはじめ、その美しい尾がアンティユの半円を順ぐりに掃いてゆく。

ハイチもマルチニックもプエルト・リコもフロリダも、南北アメリカ大陸のはざまに弧を描くアンティユの島々（「アンティユの半円」）のなかにあり、「マルチニック」の名はもはやアンティユのひとつの島の名としてしか登場しない。

この冒頭部分は、同人であり夫でもあるエメの『帰郷ノート』を想起させずにおかない。

そして囲いのないほくの島、この群島の後部に立ち上がるその晴れやかな大胆さ、その前には、背稜線によってふたつに裂かれ、われわれと同じ悲惨のうちにあるグアドループ、ネグリチュードが初めて立ち上がり、自らの人間性を信じると言明したハイチ、そしてひとりのニグロの扼殺が完了する滑稽な小さなしっぽフロリダ、そしてヨーロッパの足スペインまで巨大な体を毛虫のように這わせるアフリカ、その素裸の上を〈死神〉が大鎌をふるい刈り倒す¹⁹。

だが、それぞれの表現が部分的に似た印象をあたえるとしても、エメの詩句がよりグローバルな視野のもとに発されているのに対し、シュザンヌの挙げる場所はすべてカリブ海に属しており、それが意図的な選択であることは即座にわかるだろう。

「大いなるカムフラージュ」の2段落目以降を見ると、暴力的なハリケーンの収束と静寂の到来とともに再びハイチの美しい自然が描かれるが、第8段落になり初めて、機上にある書き手の現在の位置と視線が示される。

De nouveau la mer de nuages qui n'est plus vierge depuis qu'y passent les avions de Pan American Airways System. S'il y a une moisson qui mûrit, c'est le moment d'essayer de l'entrevoir, mais aux zones militaires interdites, les fenêtres sont closes.

そしてまた、パン・アメリカン・エアシステムの飛行機に通過され、もはや生娘でない雲の海。刈入れ時の作物があるのなら覗き見たいところだが、軍事上の禁止区域で窓は閉じられてしまうのだ。

性交に喩えられるこの表現は、何を意味しているのだろうか。アメリカ合衆国の代表的な航空会社名（当時）があえて挙げられていることには、さまざまな意図が読み取れる。強大化する合衆国がカリブ海における新たな覇者となっていることも暗示されよう。だが、ここではPan American、すなわち「汎アメリカ」という名そのものに注目したい。なぜならこの社名は続く第9・10段落の謎めいた、そして示唆に富む表現と連続しているように思われるからである。次にはこの第9・10段落と、続いて書き手の体験する真の「アンティユの顕れ」について述べられた第11・12・13段落を引用する。

[...]Nos îles vues de très haut, prennent leur vraie dimension de coquillages. Et quant aux femmes-colibris, aux femmes-fleurs tropicales, aux femmes aux quatre races et

aux douzaines de sang, elles n'y sont plus. Ni les balisiers, ni les frangipaniers et les flamboyants, ni les palmes au clair de lune, ni les couchers de soleil uniques au monde...

[...] はるか高みから見たわれらが島々は、まぎれもなく貝殻の大きさである。そしてハチドリ女たち、熱帯花女たち、4つの種と何十もの血が混じる女たちは、もはやそこにいない。バリジエも、フランジパンも、フランボワイヤンも、月明かりに照らされた棕櫚も、世界でも比類ないその日没も.....

Pourtant elles y sont.

だがそれらはそこにあるのだ。

Pourtant il y a quinze ans, révélation des Antilles, du flanc Est de la Pelée. De là, je sus, très jeune, que la Martinique était sensuelle, lovée, étendue, détendue dans la Caraïbe, et je pensai aux autres îles si belles.

15年前、プレ山の東の山腹にアンティユは顕れた。ごく若かったわたしは、マルチニックがカリブ海のなかにあり、官能的で、渦巻き、ひろがり、くつろいでいるのをそこに認め、他の島も同じように美しいであろうと思った。

De nouveau en Haïti, par des matins de l'été 44, présence des Antilles, plus que sensible, de lieux d'où, à Kenscoff, la vue sur les montagnes est d'une intolérable beauté.

ふたたびハイチで、44年夏の朝アンティユは顕れる。このうえなくはっきりと、山々を見下ろす光景がたえがたく美しいケンスコフのこの場所から。

Et maintenant lucidité totale. Mon regard par-delà ces formes et ces couleurs parfaites, surprend, sur le très beau visage antillais, ses tourments intérieurs.

そして今こそ、全的な明瞭。上から見るわたしの視線は、いたく美しい姿をしたアンティユのこれら完璧なかたちと色に、その内なる疼きをとらえる。

この行でもっとも目をひくのが島々にハチドリや熱帯の花とともにある「4つの種と何十もの血が混じる女たち」という表現だろう。この表現に、アフリカという一なる起源を重視するネグリチュードの立場とは異なり、アンティユ（マルチニック）人を人種的混血を経た者にとらえるシュザンヌの姿勢がはっきりと表れている。これはすでに引用した「ある文明の危機」の「人種がこの上なくたえまない混淆の果てに成り立っている」という表現と符合するものとして理解できる²⁰。

このようなアンティユ人のとらえ方は明らかにネグリチュードの詩人エメ・セゼールのそれと異なるものだ。エメは1920年代のバリで『黒人学生』*L'Étudiant noir* を刊行していた当時から、アンティユの混血文化を否定している。混血をめぐるこの問題は、先の段落において表れる「アメリカ」の問題とあわせて論じることが可能である。

・アメリカとしてのアンティユ——奴隷貿易を共有した場

テキストに戻れば、第9段落で述べられる現在のこの状況は、第14段落から始まる歴史的過去に起因する。第14段落から数段落は、エッセイ前半部の地理的な広がり、いわば水平的な広がりと対比的に、歴史的パースペクティブをもち、垂直的な深みを印象づける。

第10段落からのつながりでいえば、この混血したアンティユ

(マルチニック) 人の成り立ちを説明するものとして、第14・15段落にコロンブスのアメリカ・カリブ「発見」以来、この地でくり広げられた奴隷貿易の過去、そして現在もかたちを変えて継続する労働者の隷属的状況が示される。

この二つの段落は、「アメリカ」(アメリカ人・アメリカの) という語がくり返し使用されているのが特徴だ。

[...]Il fallait d'abord et à tout prix, fût-ce au prix de l'infamie de la traite des nègres, créer une société *américaine* plus riche, plus puissante, mieux organisée que la société européenne délaissée-désirée. [...]Depuis trois siècles l'aventure coloniale continue — les guerres d'indépendance n'en sont qu'un épisode — les peuples *américains* dont le comportement vis-à-vis de l'Europe demeure souvent enfantin et romantique, ne sont pas encore libérés de l'emprise du vieux continent. Naturellement ce sont les nègres d'*Amérique* qui souffrent le plus, dans une humiliation quotidienne, des dégénérescences, des injustices, des mesquineries de la société coloniale.

[...] 奴隷貿易の不名誉と引き換えに、まずなんとしてもヨーロッパの社会——見捨てつつ焦がれてもいる——より豊かで、より強く、より組織だったアメリカ社会を作り出さねばならなかったのだ。[...] 3世紀の間、植民地での冒険は続けられた——独立戦争はそのひとつのエピソードにすぎない——ヨーロッパに対してはしばしば子供っぽくロマン主義的にふるまってしまうアメリカの人々は、いまだ旧大陸のくびきから解放されていない。日常的に辱めを受け、植民地社会における頹廢と不正と吝嗇にもっとも苦痛を感じているのは、当然のことながらアメリカの黒人である。[強調:引用者]

Si nous sommes fiers de constater partout sur les terres *américaines*, notre extraordinaire vitalité, si en définitive elle semble nous promettre le salut, cependant il faut oser dire que sévissent encore des formes raffinées d'esclavage. Ici, dans ces îles françaises, elles avilissent les milliers de nègres pour qui le grand Schœlcher voulut, il y a un siècle, avec la liberté et la dignité, le titre de citoyen. Il faut oser montrer, sur le visage de la France, éclairé de l'implacable lumière des événements, la tache antillaise, puisqu'aussi bien, nombre d'entre les Français semblent déterminés à n'y tolérer aucune ombre.

われわれがアメリカの地のあちこちで、類まれな活力を誇るとしても、つまりはその活力が自分らに救いを約束してくれるようであるとしても、奴隷制はなお洗練された姿でのさばっているのだと言っておかねばなるまい。ここフランス領の島々では、この奴隷制は何千もの黒人たちを劣位に置いているのだが、彼らには偉大なるシェルシュールが一世紀も前、自由と尊厳とともに、市民としての称号を求めたのである。さまざまな情勢により仮借ない光に照らされたフランスの顔の上に、あえてアンティユの染みを見せねばならない。というのはフランス人の多くもやはり、そこにどんな影さえ許容しないと決意したかに見えるからだ。[強調：引用者]

ここで「アメリカ」とは、アンティユもその一部とする、ヨーロッパによる侵略と奴隷制の舞台となった地域を指し、その民「アメリカ人」とは、ヨーロッパからの植民者と黒人奴隷の双方を含んでいると思われる。そしてこの「アメリカ」は、15段落の後半から何度か現れる「フランス」の語と対比されているように見えるが、シュザンヌは意識的にアンティユを「アメリカ」の一部

として強調しているようだ。

アメリカというレンズを通してマルチニックを、あるいは他のアンティユを見るというこの発想は、アフリカに目を向ける『トロピック』の同人や他のネグリチユードの文学者たちには見られないものだが、マリーズ・コンデやマリ＝アニエス・ソリオらが指摘するように、後の1970年代に同じマルチニックの作家エドゥアール・グリッサンが唱えた「アンティユ性」antillanitéと明らかに呼応している。

「アンティユ性」とは、アンティユの複数の島々とその多様な言語の間には文化的な統一性があるという考え方であり、管啓次郎の補足説明によれば、「アフリカへの本質主義的帰還ではなく、カリブ海域という交通の場の五世紀の歴史を自覚し、その固有の文化的力学を重視しようとする立場」のことである²¹。またグリッサンのこの考えを引き継ぎ発展させたパトリック・シャモワゾーやラファエル・コンフィアンらは、この「アンティユ性」をまづもって「地政学的な」ものであるとしたが、この態度はまさにシュザンヌの態度と通じるといっていい²²。

「フランス」にかんして言えば、シュザンヌはここで1848年、ヴィクトル・シェルシェールの働きかけによっておこなわれた奴隷制廃止から、このエッセイが書かれた年である1945年の第二次大戦終結とシャルル・ド・ゴールを大統領とする第五共和制までの一世紀を視野に入れており、この間、実際には自由も尊厳も手にできないできたアンティユ人と、本国から離れたカリブ海の「染み」のような——この表現を使ったのはド・ゴールである——島の現実を、新体制のフランスに示そうとしているようだ。

そして続く第16段落から第20段落では、工業化と本国への同化の波に巻き込まれて自己を見失っている現代のアンティユ人の病理が提示される。

Lâchés sur les pavés des capitales, une insurmontable timidité les remplit de crainte parmi leurs frères européens. Honteux de leur accent traînant, de leur français approximatif, ils soupirent après la quiète chaleur des habitations antillaises et le patois de la « da » noire de leur enfance.

首都の路上に放置された者たちは、ヨーロッパの同胞たちのなかにあり、抑えがたい気おくれから恐ろしさでいっぱいになる。引きずるようなアクセント、いかげんなフランス語が恥ずかしく、アンティユのアピタシオンの穏やかな静けさや子供時代に聞いた黒人乳母の田舎言葉を思ってしまった息を吐く。

Prêts à toutes les trahisons pour se défendre contre la marée montante des nègres, si les Américains ne prétendaient que la pureté de leur sang est plus que suspecte, ils se vendraient à l'Amérique, comme dans les années 40 ils se sont dévoués à l'amiral de Vichy : Pétain étant pour eux l'autel de la France, Robert devenait nécessairement « le tabernacle des Antilles ».

高潮のごとく増えゆくニグロを阻止せんとあらゆる裏切りを企み、彼らの純血などまるで信用できないとアメリカ人らがひたすら主張しようと、1940年代、彼らがヴィシーの総督に仕えていたのと同じように——ペタンは彼らにとってはフランスの祭壇であり、ロベール総督は必然的に「アンティユの聖櫃」となったのだ——、彼らはみずからをアメリカへ売るだろう。

[...]le serf antillais vit misérablement, abjectement sur les

terres de « l'usine » et la médiocrité de nos villes-bourgs est un spectacle à nausée.

[...] アンティユの奴隷は「工場」の土地で惨めに、卑しく暮らしており、貧弱なわれらが町は吐き気を呼び起こす。

これらの段（第18・19・20）で描かれるのは、劣等感と疎外感に打ちひしがれたアンティユの姿。後に精神科医フランツ・ファンやグリッサンが分析したのと同様の、抑圧された被植民者の意識である。第19段落では再度「アメリカ人」の表現が見られるが、その指示対象は前段までのそれと同一ではない。シャープリー＝ホワイティングの解釈によれば、ここではアンティユのフランス人の大農園主ベケと悪名高い人種主義政策「ワン・ドロップ・ルール」に縛られたアメリカ合衆国の人々が二重に批判され、有色人と混血することに対する彼らの恐怖を示しているという²³。

・ 複数の起源、複数の文化

一方、第23段落では、再びフランス人が現れるが、そこで描かれるのはアンティユ人を鏡像とするフランス人の姿である。

[...] Quand ils se penchent sur le miroir maléfique de la Caraïbe, ils y voient une image délirante d'eux-même. Ils n'osent pas se reconnaître en cet être ambigu, l'homme antillais. Ils savent que les métis ont part avec leur sang, qu'ils sont, comme eux, de civilisation occidentale.

[...] 彼らがカリブの不吉な鏡を覗くと、そこには彼ら自身の錯乱したイメージが見える。彼らはこのアンティユ人という曖昧な存在に自らを認めようとしない。彼らは知っているのだ、混血は彼らの血を分け持っており、この人々も彼ら同

様、西洋文明の産物だということを […]。

アンティユ人はフランス人（ヨーロッパ人）から生み出された存在でもあるということが、上の引用からはっきりと読み取れる。「混血^{メティス}」としてのアンティユ人という発想は第9段落に続きここでも表れているが、次の第24・25段落にはさらに次のような表現がある。

Voici un Antillais, arrière-petit-fils d'un colon et d'une négresse esclave. Le voici déployant pour « tourner en rond » dans son île, toutes les énergies jadis nécessaires aux colons avides pour qui le sang des autres était le prix naturel de l'or, tout le courage nécessaire aux guerriers africains qui gagnaient perpétuellement leur vie sur la mort.

これがアンティユ人、ひとりの植民者とひとりの黒人奴隷女の曾孫である。その昔他者の血を黄金の価値と信じもとめた植民者に必要だったエネルギーのすべて、死に打ち克って永遠の生を生きたアフリカの戦士たちに必要だった勇気のすべてを示しつつ、島のなかで「堂々巡り」をくり返す彼。

Le voici avec sa double force et sa double férocité, dans un équilibre dangereusement menacé : il ne peut pas accepter sa négritude, il ne peut pas se blanchir. La veulerie s'empare de ce cœur divisé, et, avec elle, l'habitude des ruses, le goût des « combines », ainsi s'épanouit aux Antilles, cette fleur de la bassesse humaine, le bourgeois de couleur.

あやうく崩れそうな均衡のもとにある二重の力と二重の残

忍さをもった彼。彼はネグリチュードも受け入れないし、白くなることもできない。この引き裂かれた心は無気力に覆われ、無気力には習慣的な狡猾さ、「企み」の嗜好がともなっている。そしてアンティユには、この下卑た人間、有色のブルジョワジーが花開くのだ。

ここに初めて、またエッセイ中ただ一か所「ネグリチュード」の語が現れる。だがシュザンヌは、1939年、エメ・セゼールが『帰郷ノート』の詩的叫びのなかで訴え、アンティユの同郷者らを導いたこの世界観をここで称揚しているわけではなく、それどころかむしろある文脈のなかにあっては退けている。ネグリチュードはアフリカを精神的故郷とし、ニグロの尊厳を説く。しかしシュザンヌがアンティユ人の祖として見るのは、ニグロだけでなく、ヨーロッパから来た植民者でもあり、彼女はここでもアンティユ人が混血した存在であることを強調する。

複数の起源をもつアンティユ人という発想は、ラビットやコンデが指摘するまでもなく、1980年代、先述のシャモワゾー、コンフィアンらが主張した「クレオール性」の理論を想起させる。

歴史がこの冒険を極限まで完遂した。時の経過とともに同じアピタシオンの母胎のなかで、それはカリブ人に、ヨーロッパ人に、アフリカ人に、その残りの世界のほとんどすべてを付け加えたのだ²⁴。

シャモワゾーらの「クレオール性」理論は人種の混血というより多様性の文化を称揚したものであり、またアンティユを発信元としつつもその視野は広く世界中におよんでいる。とはいえ、ネグリチュードの世界観が輝きをもっていた1940年代、まさにその中心に近い場でシュザンヌがアンティユ人を多様な起源をもつ

者と規定していることは確認しておくべき事実であり、この点では1970年代から80年代にかけて主張されたクレオール理論に先んじているということができる。

・来るべきアンティユ人の詩学

シュザンヌのテキストに戻れば、複数の起源をもったアンティユ人は、第25段落の後半部を見てもわかるとおり、ブルジョワ的な欲望にとらえられ、工業化の最先端にあえて身を置き、相変わらず隷属状態にあることをやめない。

シュザンヌはこの現況に病理を見て批判しつつも、アンティユの若者たちが工場で身を削るその空間にも、新しい何かが自ら誕生する気運を嗅ぎ取っている。

[...] Il y a dans des centaines de hangars sordides où rouille la ferraille, une invisible végétation de désirs. Les fruits impatients de la Révolution en jailliront, inévitablement.

[...] 鉄屑が錆つく何百もの汚れた倉庫に、目に見えない欲望の植物はある。革命に焦がれる果実は止めようもなく今飛び出さんとする。

そしてこの内なる力を明るみに出すべく、エッセイ終結部では、来るべきアンティユのヴィジョンを描いて見せる。

Ici entre les mornes lisses de vent, Fonds-Gens-Libres. Un paysan qui, lui, n'a pas été saisi du tremblement de l'aventure mécanique, s'est appuyé au grand mapou qui ombrage tout un flanc du morne, il a senti sourdre en lui, à travers ses orteils enfoncés nus dans la boue, une lente poussée végétale. Il s'est tourné vers le coucher

de soleil pour savoir le temps qu'il ferait demain — les rouges orangés lui ont indiqué que le temps de planter était proche — son regard n'est pas seulement le reflet pacifique de la lumière, mais il s'alourdit d'impatience, celle-là même qui soulève la terre martiniquaise — sa terre qui ne lui appartient pas et est cependant sa terre. Il sait que c'est avec eux, les travailleurs, qu'elle a partie liée, et non avec le béké ou le mulâtre. Et quand, brusquement, dans la nuit caraïbe toute pavoisée d'amour et de silence, éclate un appel de tambours, les nègres s'apprêtent à répondre au désir de la terre et de la danse, mais les propriétaires s'enferment dans leurs belles maisons, et derrière leurs toiles métalliques, ils sont, sous la lumière électrique, semblables à des papillons pâles pris au piège.

ここは風の吹くなだらかな丘に挟まれた「自由人たちの里」。機械の冒険には揺らがなかった農民がひとり、山腹を影でおおうマプーの大樹に身を預け、泥に沈み込む裸足の足指をつたって、自分の内にゆっくりと植物的なものが芽生えるのを感じていた。彼は沈む陽をふり返り、明日の天気を知ろうとする——オレンジがかった緋色は植えつけの時期が近いことを教えてくれる——彼のまなざしは穏やかに光を映しているだけではない、待ち焦がれて——この焦燥がマルチニックの土地、彼が所有してはいないが彼の土地を蜂起させる——重みに耐えているのだ。彼は知っている、大地がその一部をなし、つながっているのは彼ら労働者であり、ベケやミュラートル²⁵ではないことを。そして、愛と静けさに飾られたカリブの夜のさなか唐突に、太鼓の呼び声が炸裂し、ニグロたちは大地とダンスの欲望に応じようと備えるが、瀟洒な屋敷に閉じこもる家主たちは、金網の背後にあり、電灯

の下、罨にかかった青白い蝶たちのようである。[強調：原著者]

第 26 段落で、本国経営の工場労働に勤しむ者たちとは対比的に描かれるこの農民こそ、シュザンヌが提示するアンティユ人の姿であろう。彼は直接に島の土地と接続された人間であり、その姿は単に土や樹木とともにあるだけでなく、これ以前のエッセイでシュザンヌが何度も提示してきた存在じたいが植物的である人間、すなわち「植物人」のイメージとして描かれる。

「植物人」という発想は、先述したようにフロベニウスのアフリカ文明論からの借用であるが、段落後半ではその文脈を受け継ぎ、アフリカの太鼓とダンスのイメージが現れ、第 27 段落へと連続する。

Autour d'eux, la nuit tropicale se gonfle de rythmes, les hanches de Bergilde ont pris aux roulis montés des abîmes aux flancs des volcans leur allure de cataclysme, et c'est l'Afrique elle-même qui, par-delà l'Atlantique et les siècles d'avant les négriers dédie à ses enfants antillais le regard de convoitise solaire qu'échangent les danseurs. Leur cri clame à voix rauque et large que l'Afrique est là, présente, qu'elle attend, immensément vierge malgré la colonisation, houleuse, dévoreuse de blancs. Et sur ces visages constamment baignés des effluves marins proches des îles, sur ces terres limitées, petites, entourées d'eau comme de grands fossés infranchissables, passe le vent énorme venu d'un continent. Antilles-Afrique, grâce aux tambours, la nostalgie des espaces terrestres vit dans ces cœurs d'insulaires. Qui comblera cette nostalgie ?

彼らの周囲では、熱帯の夜がリズムに弾けそうになり、ベルジルドの腰は火山中腹の深淵から立ちのぼる揺れに大異変の到来を予感し、大西洋と奴隷貿易以前の数世紀との彼方で、踊り手たちの交わす太陽の欲望のまなざしをアンティユの子供たちに捧げるのはアフリカそのものなのである。彼らは大きな嘆れ声で、アフリカはそこに存在している、白人たちによる貪るように荒々しい植民地主義にも負けず、まったく無垢なままに待っていると叫んでいる。島々に近い海の波にたえず洗われたこの顔の上を、越えられない大きな掘割のように水で囲まれた小さく限られたこの土地の上を、大陸から来た大風が通過する。アンティユ—アフリカ。太鼓のおかげで、土地空間へのノスタルジーはこの島の心のなかに生き続けているのである。誰がこのノスタルジーを埋めるのだろうか？

アンティユ人を複数の起源をもつ者としてとらえたシュザンヌだが、アフリカとのつながりは依然強固であると考えているようだ。それは「アンティユ—アフリカ」という連結符号をともなった一語に明白に示されており、遠大な時間と広大な空間を隔てながらも両者が親と子の関係にあることが述べられている。また前段落から引き継がれているイメージからもわかるように、エメ・セゼールの『帰郷ノート』同様、シュザンヌのいづくアンティユの詩学にとって、あるいは自己の解放にとってアフリカの太鼓のリズムとダンスは不可欠なものとしてある。

Cependant les balisiers d'Absalon saignent sur les gouffres et la beauté du paysage tropical monte à la tête des poètes qui passent. A travers les réseaux mouvants des palmes ils voient l'incendie antillais rouler sur la Caraïbe qui est une tranquille mer de laves. Ici la vie s'allume à

un feu végétal. Ici, sur ces terres chaudes qui gardent vivantes les espèces géologiques, la plante fixe, passion et sang, dans son architecture primitive, l'inquiétante sonnerie surgie des reins chaotiques des danseuses. Ici les lianes balancées de vertige prennent pour charmer les précipices des allures aériennes, elles s'accrochent de leurs mains tremblantes à l'insaisissable trépidation cosmique qui monte tout le long des nuits habitées de tambours. Ici les poètes sentent chavirer leur tête, et humant les odeurs fraîches des ravins, ils s'emparent de la gerbe des îles, ils écoutent le bruit de l'eau autour d'elles, ils voient s'aviver les flammes tropicales non plus aux balisiers, aux gerberas, aux hibiscus, aux bougainvilliers, aux flamboyants, mais aux faims, aux peurs, aux haines, à la férocité qui brûlent dans les creux des mornes.

だがアブサロムのバリジエは亀裂の上で血を流し、熱帯の風景の美は通り過ぎる詩人たちの頭へ登る。椰子の木の揺れ動く網目を通して、彼らはアンティユの炎がカリブ海の上を転がるのを見る——それは静謐な溶岩の海なのだ。ここでは生命に植物の火がともる。ここでは地質学上のさまざまを生かし留める熱い大地で、植物は受難＝情熱と血を通し、原始的な作りを通し、踊り娘たちのカオスの腰から生じる不安げな鈴の音を確かなものにする。ここでは眩暈に揺れる蔦が崖を幻惑しようとして空中でのポーズをとっており、それらは太鼓に宿った夜を抜けて登ってゆく宇宙の捕えがたい振動に震える手をつかまっている。ここでは詩人たちはその頭が揺らめくを感じ、峡谷の新鮮なおいを嗅ぎ、鳥々の萌芽を奪いとり、鳥々の周囲の水の音を聞き、熱帯の炎が、もはやバリジエ、ジェルブラ、ハイビスカス、ブーゲンヴィリア、フラ

ンボワイヤンではなく、丘のふもとに燃え上がる飢餓や恐れ、憎悪、残酷さに生氣を得るのを見るのである。

このように第 28 段落では、再び植物のイメージ（「アブサロムのバリジエ」）が現れて火、熱、血のイメージと一体化し、その背後には前段落と変わらず太鼓とダンスに象徴されるアフリカがある。エグズティスムによる表面的な風景美の礼賛とは根底から異なる、新たな詩的世界の誕生である。

冒頭部分と呼応するようにこの段落にも自然のさまざまな要素が溢れ、その末尾では、かつて「ある詩の貧困」のなかでも激しい口調で退けられた「ハイビスカス、ブーゲンヴィリア」といった熱帯の花々の名がここでも改めて拒絶され、その裏側の悲惨や不幸が突きつけられるが、両者は炎のイメージのもとに表裏一体のものとなっている²⁶。

そして次の第 29 段落がこの詩的エッセイの結語となる。

C'est ainsi que l'incendie de la Caraïbe souffle ses vapeurs silencieuses, aveuglantes pour les seuls yeux qui savent voir et soudain se ternissent les bleus des mornes haïtiens, des baies martiniquaises, soudain pâlisent les rouges les plus éclatants, et le soleil n'est plus un cristal qui joue et si les places ont choisi les dentelles des parkinsonias comme évantails de luxe contre l'ardeur du ciel, si les fleurs ont su trouver juste les couleurs qui donnent le coup de foudre, si les fougères arborescentes ont sécrété pour leurs crosses des sucres dorés, enroulés comme un sexe, si mes Antilles sont si belles, c'est qu'alors le grand jeu de cache-cache a réussi, c'est qu'il fait certes trop beau, ce jour-là, pour y voir.

このようにしてカリブの炎は、見ることを知っている唯一の目に沈黙した目くらましの蒸気を吹きつけ、突如ハイチの丘とマルチニックの湾の青は艶をうしない、突如もっとも鮮やかだった緋色はくすみ、太陽はもはや戯れる水晶ではない。そしてさまざまな場所が空の灼熱を阻む豪華な扇のようなパーキンソニアのレースを選んだとしたら、花々が稲妻で一撃するのにぴったりの色の見つけ方を知っていたとしたら、木生羊歯がその性器のような丸まった渦巻き状のものから金色の樹液を分泌したとしたら、わたしのアンティユがかくも美しいとしたら、それは壮大なるかくれんぼが成功したということであり、その日はそう、あまりに晴れやかで、よく見ることなどできないだろう。

マリーズ・コンデが鋭くも指摘したように、視線、見ることの力が問われている。「このエッセイは、行間を読むことを知らない者を悩ませる。シュザンヌ・セゼールが示したいと思っているのは、島の美しさに圧倒され、盲目にさせられる部外者が、同じように島の内部の現実を理解することがいかに困難かということである」²⁷。熱帯の自然の奥に人は何を見ることが出来るか。鮮やかな風景を舞台とした「かくれんぼ」cache-cache——冒頭と同様、アンティユの異なる場所、ハイチとマルチニックが一体となり示されている——は巧妙であり、隠されたものを見つけ出すことは容易ではない。極彩色のカムフラージュを見破り剥ぎ取った後、真新しい風景を再編することこそ、アンティユ芸術の使命だとシュザンヌは考えているようだ。

結びに代えて

見てきたように、シュザンヌ・セゼールが1940年代に発表した論考の最終地点である「大いなるカムフラージュ」には、マル

チニック、あるいはアンティユ人の自己意識を確立し、その上で集団としての詩学を作り上げようとの意思と呼びかけが読み取れる。

この試みにおいて、植物のイメージが重要となる。シュザンヌは、民族学者フロベニウスのアフリカ文明論からエチオピア人の特徴である植物的な生のあり方をマルチニック人に当てはめた。植物人たるマルチニック人は、自然そのものと接続している。その自然は鮮やかな熱帯のそれであるが、エグゾティスムの視線は断固として拒否される。

アンティユの真の風景を見出すためには、まず自らを抑圧状態から解放しなければならないが、『トロピック』が刊行されていた第二次大戦期のアンティユは、元奴隷である有色の住民たちがこれまでになくヨーロッパ文化への同化を強いられ、自己意識の獲得が困難な時期だった。

この抑圧状態から脱するためにシュザンヌは、奴隷制の歴史を直視した上で今あるアンティユ人を見ようとするが、白人植民者と黒人奴隷の子、すなわち混血としてのアンティユ人という視点、ひいては複数の起源をもつ混合文化としてのアンティユ文化という視点は、それが40年代のネグリチュードの中心というべき場で提案されたものであることを考えると特筆すべき事実である。

ジェニファー・ウィルクスの指摘するように彼女は、アンティユのアイデンティティが不動で本質的な存在であるよりも、ダイナミックで混合的な諸文化によりかたちづけられたものと考えているようだ²⁸。またラビットは、ここにいたってシュザンヌが、ファノンやアルベール・メンミに先駆けて植民者／被植民者のダイナミクスを理論化し、「有色」人という生物学的アイデンティティでマルチニック人をとらえる本質主義を採らず、文化形成とかたちでの集団意識を築くことの呼びかけをおこなったと評価している²⁹。

一方、文化を基礎とした集団意識を確立するにあたりシュザンヌは、マルチニックという故郷の島を同じくカリブ海に囲まれたアンティユの島々とひとつながりのものと意識化し、これをアメリカの名で呼んだ。これは地理的な隣接関係であるとともに、この場所を舞台とした奴隷貿易の記憶を共有する者たちの集合体ということもできる。

シュザンヌは「クレオール」(créole)という表現を一度も使用しておらず、またエメと同様、言語としてのクレオール語の可能性について見識を述べたことがないが、こうしたアンティユ人観、もしくはアメリカの一部としてのアンティユ(マルチニック)観は、1970年代以降、英語圏の詩人エドワード・カマウ・ブラスウェイト、同郷であるマルチニックのグリッサン、シャモワゾー、コンフィアンらが唱え、90年代になるとより広く世界に認知されることになるクレオール諸理論やアンティユ性の理論に明らかに共通する部分がある。

だがマリーズ・コンデが指摘するように、シュザンヌがブラスウェイトやアンティユ性、クレオール性の作家たちと異なっているのは、彼女が奴隷制時代のプランテーション・システムの遺産である社会政治的な現実により深い関心を寄せているという点である。コンデによれば、彼女はおそらく、黒人と白人、すなわち奴隷と植民者の末裔たちの困難な関係が解決を見なければ、複雑なアンティユのメティサーージュ(métissage, 混血)は深化しないと考えていた³⁰。

一方でシュザンヌは、ネグリチュードを全面的に退けているわけではない。しかし過去のアフリカを称揚する懐古的な姿勢には否定的であり、その視線はつねに未来を志向している。同時にエメや後年のクレオール作家たちと同様に、アフリカ性はたえず意識されており、テキストの背後で自己を解き放つ太鼓のリズムが響きやむことはない。

【注】

- 1 Suzanne Césaire, *Le grand camouflage : Ecrits de dissidence (1941-1945)*, Edition établie par Daniel Maximin, Editions du Seuil, 2009, p.9-10.
- 2 René Ménéil, « Pour une lecture critique de *Tropiques* », *Tropiques : Collection complète, 1941-1945*, Jean-Michel Place, 1978, xxxiv.
- 3 例を挙げれば、シャルル・ベギーの詩 (1号)、クロード・マッケイの詩 (仏訳、2号)、アンドレ・ブルトンの詩 (3号、5号) やエッセイ (11号)、ラフカディオ・ハーン (仏訳、4号) やジョルジュ・グラシアンによるコント (4号)、ピエール・マビーユの詩 (4号、12号)、フロベニウスの伝語訳エッセイ (5号)、ロートレアモンの詩の抜粋 (6・7号)、S・ジャン・アレクシスやアルマン・ニコラのエッセイ (8・9号)、リディア・カブレラのコント (10号)、エチャンブルのエッセイ (11号)、アレホ・カルペンティエルの書評 (12号)、ヴィクトル・シェルシェールのエッセイ抜粋 (13・14号) など。
- 4 55年、ハーンの小説『ユーマ』を翻案し、奴隷解放前夜のマルチニックを舞台とした戯曲『ユーマ、自由の暁』*Youma, Aurore de la liberté* を執筆し、アマチュア劇団 Scène et Culture により上演されるが、未刊行にとどまっている。
- 5 マクシマンは、最後のエッセイ「大いなるカムフラージュ」と呼応関係にあるとしてアンドレ・ブルトンとアンドレ・マッソンの対談「クレオール対話」« dialogue créole » を、そしてシュザンヌの人物と思想に着想を得たとしてブルトン、マッソン、ルネ・メニルの詩を巻末に付している。
- 6 Georgiana Colville, *Scandaleusement'elles : trente-quatre femmes surréalistes*, Jean Michel Place, 1999, p.74.
- 7 シュザンヌ・セゼールが『トロピック』に発表した論考は以下の通り：« Léo Frobenius et le problème des civilisations », *Tropiques* no.1, avril 1941, p.27-36. « Alain et l'esthétique », *Tropiques* no.2, juillet 1941, p.53-61. « André Breton, poète », *Tropiques* no.3, octobre 1941, p.31-37. « Misère d'une poésie : John-Antoine Nau », *Tropiques* no.4, janvier 1942, p.48-50. « Malaise d'une civilisation », *Tropiques* no.5, avril 1942, p.43-49. « 1943 : Le surréalisme et nous », *Tropiques* no.8-9, octobre 1943, p.14-18. « Le grand camouflage », *Tropiques* no.13-14, 1945, p.267-273.
- 8 “Il passe à côté. Il regarde. Mais il n'a pas « vu ». Il lui arrive de

-
- plaindre le nègre. Mais il n'a pas connu l'âme nègre" S.Césaire, « Misère d'une poésie : John Antoine Nau », *op.cit.*, 1942, p.49.
- 9 "Littérature hamac", "Littérature de sucre et de vanille", "Tourisme littéraire", *art.cit.*, p.50.
- 10 *Ibid.*
- 11 S. Césaire, « Malaise d'une civilisation », *op.cit.*, no.5, 1942, p.45.
- 12 Marie-Agnès Sourieau, « Suzanne Césaire et *Tropiques* : de la poésie cannibale à une poétique créole », *The French Review*, Vol.68, No.1, October 1994, p.71.
- 13 S.Césaire, *art.cit.*
- 14 *art.cit.*, p.48.
- 15 S. Césaire, *La grand camouflage*, *op.cit.*, p.12.
- 16 "Il ne s'agit point d'un retour en arrière, de la résurrection d'un passé africain que nous avons appris à connaître et à respecter. Il s'agit, au contraire, d'une mobilisation de toutes les forces vives mêlées sur cette terre où *la race est le résultat du brassage le plus continu*"
これは後退を意味しているのでも、われわれが認め敬愛することを学んだアフリカの過去の復活を意味しているのでもない。そうではなく逆に、人種がこの上なくたえまない混淆の果てに成り立っているこの土地に混在するあらゆる活力を動員することなのである。[強調：引用者] S.Césaire, *art.cit.*
- 17 « Le grand camouflage », *op.cit.* 以下、日本語部分は大辻訳だが、次の文献に収録された英訳を参照したことを断っておく：Michael Richardson, Krzysztof Fijakowski, *Refusal of the shadow : Surrealism and the Caribbean*, Verso Books, 1996; T.Denean Sharpley-Whiting, *Negritude Women*, *op.cit.*
- 18 セゼール夫妻は1944年5月から12月、シュルレアリスト詩人にして政府の文化官ピエール・マビーユの招きによりハイチ講演旅行をおこなった。したがって、ここで引用するハイチにかんする記述は、現実のこの地の訪問体験に基づいたものといえることができる。David Alliot, *Aimé Césaire : Le nègre universel*, Infolio éditions, CH-Gollion, 2008, p.85.
- 19 Aimé Césaire, *Cahier d'un retour au pays natal (1939)*, Présence Africaine, 1983, p.24. エメ・セゼール『帰郷ノート／植民地主義論』砂野幸稔訳、平凡社、1997年、44-45ページ。

-
- 20 S. Césaire, « Malaise d'une civilisation », art.cit., p.45.
 - 21 管啓次郎『オムニフォン〈世界の響き〉の詩学』、岩波書店、2005年、25ページ。
 - 22 Jean Bernabé, Patrick Chamoiseau, Raphaël Confiant, *Eloge de la créolité*, Gallimard, 1989, p.32-33.
 - 23 T.Denian Sharpley-Whiting, *Negritude Women*, University of Minnesota Press, Minneapolis/London, 2002, p.99-100.
 - 24 Patrick Chamoiseau, Raphaël Confiant, *Lettres créoles : Tracées antillaises et continentales de la littérature : Haïti, Guadeloupe, Martinique, Guyane, 1635-1975*, Gallimard, 1999, p.52.
 - 25 フランス領アンティユで「ベケ」とは白人の大農園主、「ミュラートル」とは白人と黒人の混血のことを指すと同時に、しばしば成り上がりの有色人ブルジョワ階級を指し、おそらくここでは後者を意味する。
 - 26 実際、典型的な熱帯の植物であるバリエエやフランボワイヤンはその鮮やかな深紅の色と形状が炎や血を連想させる。
 - 27 Maryse Condé, « Unheard Voice », Adele S. Newson, Linda Strong-Leek (eds), *Winds of change : the transforming voices of Caribbean women writers and scholars*, P. Lang, New York, 1998, p.66.
 - 28 Wilks, *op.cit.*, p.121.
 - 29 Rabbitt, art.cit., p.546.
 - 30 Condé, art.cit., p.65.